



遠くへ行きたい  
-ここでないどこかへ-

私は『私』を棄ててしまいたい。

『平凡な毎日』を抜け出し、  
私はどこへ向かおう。



この信号を切替え、  
汽車に揺られるまま進もうか。



ガタンゴトン。

揺れる汽車の響きは、  
なにかに似ていると思った。



ぼんやりと車内を見つめる。

人が見ないだろう天井にまで  
行き届いた掃除に、  
職人の心意気を感じた。



汽車を乗り継ぎ、ぶらり降りた駅。  
私はひとり途方に暮れる。



道行く人の流れに身を任せれば、  
白亜の建物が  
私を無言で迎えた。



「祈り」と「願ひ」は似ている。  
私の中に信じる神様はいないけど、  
もしもこの世の中に  
『神様』なんてものがあるなら、  
私はなにを「願う」だろう。



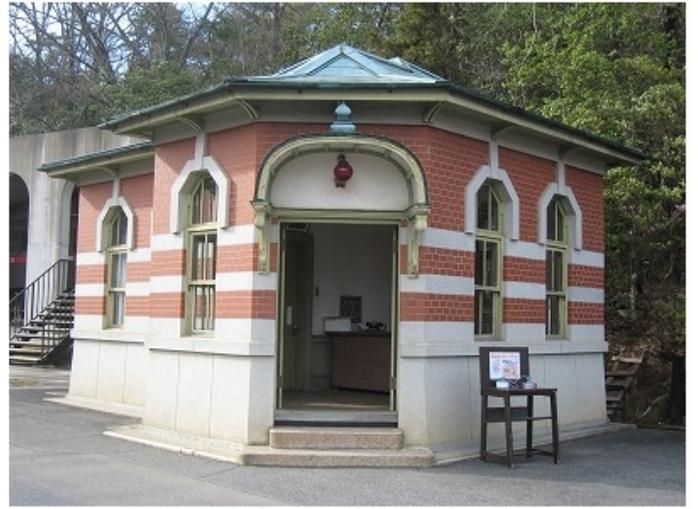
車引く馬に、  
「生まれはどこだ」と聞いてみた。  
御者の「フランスだよ」  
と力強い声が返ってきた。  
逞しい足で、  
彼らは今日も大地を蹴るのだろう。



空が落ちてくることを恐れていれば、  
それは「杞憂」というのだと教えられた。  
空はいつまでも、空であるらしい。



ひたひたと足下に波が立つのだという、  
「それは後悔という海だ」と教えられた。



「愛されるより、愛したい」  
されど時には、無性に愛されたいくなる。  
見知らぬ町の見知らぬ人の人の優しさが、  
私を素直にさせる。  
無償の『愛』は『癒し』に似ている。



地球をぐるりと一回り  
ま、すぐに歩き続けられるはずもない  
時に汽車、時に船、時にプロペラ  
ゆらゆらと 揺れに身を任せ  
時に快晴、時に嵐、時に風  
遠回り、戻り道、迷い道  
ぼんやりと 待つこともあるだろう



ひとりきりで歩くことが辛いならば、  
名前を呼ぶよ。  
唇に乗せるだけで強くなれる名前を、  
呼ぶよ。



ああ、そうだ。  
ここが私の還る場所。

「おかえり」



\* END \*